



令和七年度 第五二回

羽島市文芸祭（一般）

三賞作品集



目次

短歌部門	俳句部門	川柳部門	現代詩部門
⋮	⋮	⋮	⋮
1°	4°	7°	9°
へ	へ	へ	へ
ー	ー	ー	ー
ジ	ジ	ジ	ジ

短歌部門

〈文芸祭賞〉

宇陀市 渡辺 勇三

ざら紙にくるむ給食コッペパン

〔評〕

昨今、昭和を回顧するテレビ番組が多く放映されているように思いますが、この作品はご自分の経験から「昭和」を詠んでいる点がいいと思いました。現在は衛生上の観点から、給食のパンを持ち帰ることは出来ないようですが、おおらかだった時代を感じますね。ざら紙(当時はざら半紙あるいはわら半紙と言っていました)、コッペパンの具体が効いています。

〈優秀賞〉

安曇野市 穂苅 真泉

初めての福祉用具を頼りにし

〔評〕

牡丹の庭に母は降り立つ

身体の不自由なお母さんが、初めての福祉用具をつけて庭に降り立ったと言う。庭はちょうど牡丹の見頃なのだろう。目を細めて見惚れているお母さん、それを見つめる作者、簡潔な表現が多くを語ってくれます。福祉用具は具体的になんでしょう。か。音数が合うようでしたらその名称をいれてもいいかと思えます。

川に沿い単線電車進みゆく

〔評〕

駅の数だけ秋は深まる

岐阜市 田中 恭司

川に沿う単線電車という、長良川に沿う長良川鉄道か、飛騨川に沿う高山線が思われますが、どちらも景色の美しい山間部を走る路線です。作者は秋の一日、北上する電車に移り変わる風光を楽しんでいる。そしていくつもの駅を通り過ぎるに従って紅葉が色鮮やかになってゆくことを、下句のように表現している。読み手を納得させる独自の感性が素晴らしい。

〈秀作賞〉

高槻市 打浪 紘一

逆上がり初めて出来た瞬間を

〔評〕

祝ってくれた赤とんぼたち

逆上がりが初めて出来たのはおいくつの時だったのでしょうか。子供の時の思い出と受け取りました。運動があまり得意でなかったのでしょうか。なんどもなんども失敗しては挑戦する。そんな努力が実つてやっと出来た瞬間、まわりを見たら赤とんぼがたくさん飛んでいる。まるで逆上がりの成功を祝ってくれているように。とても嬉しかったのでしよう、喜びがあふれるように詠まれますね。「赤とんぼたち」の「たち」という表現が作者の優しさだと、読む者にも温か

く伝わります。

飛騨市 横山 美保子

もらいたる粉薬の味覚えており

今は空き地の小さき医院の

〔評〕

子供のころの薬は、粉薬か水薬だったように記憶していますが、作者もそうだったんですね。そしてその味を覚えていてという。

懐かしい医院が閉院してそこは空地になっている、小さな医院だったが空地になるとさらに小さく感じますね。3句目の「て」を取り、結句の「小さき」を「ちいさき」と読んで「の」を取ると、リズムが整うのではないかと思います。

名古屋市 遠藤雄介

背伸びしたきみを成型するように

いまあたらしく履くハイヒール

〔評〕

少女期を脱したばかりの若い女性が今初めてのハイヒールを履こうとしている。作者はこの「きみ」の恋人？父親？ハイヒールを履いたら背伸びしたきみが形作られるだろうと想像しながら。

「背伸び」は実景としての表現ではなく、「もう子供じゃない」と主張している「きみ」の心の表現ととって良い作品と思います。

〈審査員作品〉

藤田 正代

冷水に飛び込むやうに酷暑日を

スーパの冷房に入りゆく

髪細くなったと思ふなにもかも

痩せてゆくらし 赤いそうめん

緩慢に別れに向かふ日のあはひ

たれも憎まず生きてゆきたし

松野 律子

憎むこと怯えることのみ記憶する

こどものひとみの中の戦場

前線に消えし兵士ら軽き身に

なれただらうか風に乗るため

国境のなき世界地図、息の思い

こもる二万ピースのパズル

〔総評〕

令和七年度の羽島市文芸祭「短歌」一般の部の応募総数は二〇五首(応募者数は七五人)でした。昨年より若干増えたこと、嬉しく思いました。今年は例年にも増して暑さが厳しく、また、戦後八〇年という節目の年でしたが、それらを詠んだ作品がほとんど見られませんでした。ウクライナ侵攻やパレスチナ問題などは遠い国のことになってしまっているように感じました。

昨年は、家族を詠んだ作品が多かったのですが、今回は少なく、歌材は身近なことなど多岐にわたって個性的な歌が多かったようです。

また、わずかですが、世相を捉えて詠まれた作品も見られました。

大谷選手、リニア工事、米不足、物価高等々、ありましたが、テレビや新聞の言葉ではなく、自分に引き付けて自分事として詠めば共感を得られるのではないかと思われました。

歌を詠んだあと、必ず推敲をされると思いますが、まず第一にこの歌で自分はなにを言いたいのか、それが自分の言葉で読み手に伝わるように言えているのか、意味の重なった言葉や表現はないか、漢字、仮名、カタカナのバランスはどうか、ひとりよがりになっていないか、等を見直してみるといいと思います。声をだして読んでみるのもいいでしょう。表現上、止むを得ない字余り、字足らずはあると思いますが、出来るだけ定型におさめるように努めて欲しいと思います。

来年度もより多くの意欲的な作品を期待しております。

評 藤田 正代

松野 律子

俳句部門

〈文芸祭賞〉

名古屋市 池谷 幹子

秋の溪意志ある如く水走る

〔評〕

この作品の印象的な点は、無機物である溪の水に、生物であるが如き意志を感じ取ったと言う観点です。勿論、声も無く音のみの世界なのですが、そこに意志を感じ取ったと言う詩人の気丈さを良しと感じます。

〈優秀賞〉

平塚市 しらが式部

シニヨンの後れ毛光る五月かな

〔評〕

シニヨンとは髪を後頭部や襟元に束ね、渦巻き状や輪型にねじり上げまとめた髪型とのこと。男性ではなかなか思い付かない部所を取り上げての作品である。それを光らせているのは五月の燦々たる日の光。

髪と言う身体の一部と、五月と言う心爽やかな季節との取り合わせがこの一句の魅力であると言えよう。

廃線のレールの黙^{もだ}や後の月^{のち}

度会郡 海だるま

〔評〕

廃線であるから音や声の無いのは当然と申せましょう。しかし、その点が夜になって更に印象的な事象となり、心に刻まれる程の静けさを生みました。

「レールの黙^{もだ}と捉えた作者の心象が、作品を読んだ側にまで伝わって来る感じであることが印象的です。

〈秀作賞〉

一宮市 光崎 賢治

荒尾根に憩う我らと雷鳥と

〔評〕

登山の最中に雷鳥に出会うことは珍しいと言えます。作者が出会えたのは幸運だったと申せましょう。この句に詠まれた雷鳥との出会いに限らず、取り合わせや併置をうまく詠み入れることによって佳句は得やすくなると申せましょう。

さて作者は雷鳥と出会うことによって心に何を描かれたことでしょうか。

言うほどの秘密は持たずサングラス

目黒区 清水 吉明

〔評〕

俳句の持つ特性のひとつとして滑稽味を挙げることが出来ます。サングラスを用いることで、人はその表情を隠すことが出来ます。

この作品の魅力は、それ程顔を隠す必要も無いのに「私は秘密は持たず」と表現したことです。それによって作品の滑稽味が引き出されました。

岐阜市 堀 学

万緑や親子で挑む泣き相撲

〔評〕

相撲を取る御本人にとっては面倒なことでしょう。しかし大声で泣く子は元気に育つと言う言い伝えがある以上、こうした行事は無くなることは無いと申せましょう。

赤ちゃんたち！泣いてガンバレ！

〈審査員作品〉

榎 未知子

ゆつくりとかなしむために吾亦紅

眠るたび父は銀河に近づきぬ

東京の夜景に薔薇を加へけり

清水 青風

気丈なる山を揃へて美濃秋へ

白障子閉めて記憶の友封ず

墓百基楚々と撫でゆく秋の風

〔総評〕

本年も良い作品に巡り合わせて頂きました。選を為すに於いて、等列、成績順に為すと言うことは難しいことです。しかしこの点は選者の個性に依ると御理解頂くより仕方がありません。勝手な言い訳ですが、私は今は亡き飯田龍太先生を師として俳句を学びました。従って少しでも飯田龍太先生の眼に近い視線で作品を選んだ積りです。

選を為すには選句数と言う制限があります。今回は選句されなかったが次回には！と言う心積りが俳人としては大切だと思います。

皆様の更なる御健吟を祈念申し上げ、総評の代りとさせていただきます。

評 權 未知子

清水 青風

川柳部門

〈文芸祭賞〉

長浜市 野口 成人

ドナーへの恩を長生きして返す

〔評〕

命を繋げてくれたドナーへの感謝を常に心と身体で感じているからこそ、飾らない言葉で美しく力強い作品になっています。

〈優秀賞〉

春日部市 しんのすけ

指示役は妻かスマホでお買い物

〔評〕

定年後の一コマでしょうか…妻だけでも大変なのにスマホにまで指示されるとは！これぞ川柳というユーモア句に感服です。

岐阜市 根本 英治

今日だけは純米を炊く盆供養

〔評〕

米不足の昨今でもお盆だけは美味しいご飯をお供えしたい！幸せな先祖ですね。日本人の思いやりと気遣いが表れています。

〈秀作賞〉

三田市 谷口 修平

指先と瞳で語る手話の恋

〔評〕

素敵なお二人の間に、心の声と声、そして想いが響き渡っていますね。恋愛ドラマのような一句です！

甲府市 風間 なごみ

ビタミンをいっぱいくれたのは恩師

〔評〕

恩師への句は多くありますが、ビタミンという言葉選びが秀逸です。明るく前向きな恩師だったのでしよう！心の栄養ですね。

奈良市 和田 康

今日もまた読める字のない書道展

〔評〕

日常の違和感をさらっと十七音にまとめるのが川柳！今日もまたの上五に、それでも観に行ってしまう可笑しさが溢れています。

〈審査員作品〉

今井 極子

戦場の若い命を償えぬ

裸電球夢に向かっていた昭和

青春を支えた父のハングリー

南 さと奈

あらたまのままでも君は輝いて

屋久杉に甘つちよろいと見下ろされ

まだ夢もあって飛距離を鍛えてる

〔総評〕

前回より若干応募人数が増え、川柳への関心の高さと喜んでおります。

文芸祭賞は、大きなテーマを五七五にさらりと表現していて感心致しました。

スマホ・AI・宮仕え・戦争・今年の大きな話題の米不足はまた恋の句など、いろいろな世界を楽しませていただきました。ありがとうございます。

「川柳はこれから先の人生に必ず糧になる」

私の川柳の師から頂いた一言です。この言葉を胸の奥に抱いてきました。皆さんも悲しい時、辛い時、嬉しい時、何気ない日常まで、これからも川柳に詠んでください。来年も素晴らしいドラマに出会うことを楽しみにしております。

評 今井 極子

南 さと奈

現代詩部門

〈文芸祭賞〉

「此処から」

札幌市
cofumi

故郷の光は優しい羽根
一日に終わりがないと
錯覚させる

玄関の向こうには
自分を守ってくれる場所が
あることを知っていた少女
全ては此処から始まり
やがて此処で終わる

年々まるくなる母の背中
うたた寝するその姿に
熱いものが込み上げる
葉が一枚一枚落ちるように
不安は心に積もってゆく
振り返る日々が増えてゆき
新しい朝の香りに感謝する
一日もまた
此処から始まり
此処で終わる

母が紙袋に詰めた物は
昔と何も変わらない
私はいくつになっても
あなたの娘
不満も不安もない
光のある方へ歩いて行くことを
あなたが教えてくれたから
目を閉じれば
いつでもあの頃に戻れる
道標は此処から続き
そして此処へ帰る

「まだまだ力はあるよ」
そう言って握るその手は
柔らかく細い
靴を履きながら
込み上げるものに戸惑う
脚の長さが違う椅子のように
カタカタと不器用に傾く感情
「また来るから」と念を押す
命は此処で始まり、
まだ、旅の途中

〔評〕

故郷の思いと親子の愛惜の心がにじみ出ている詩作品です。

「故郷の光は優しい羽根」と言い切る素直な作者の心の思いを見ることができます。人生で故郷を離れ、故郷に帰るたびに、母は紙袋にお土産をもたせる「昔と何も変わらない」姿に、年々「丸くなる母の背中」を見るたびにこみ上げるものがあります。

しかし「私はいくつになってもあなたの娘」として全体的に哀調あるすぐれた詩情を醸し出しています。心に残る作品です。

〈優秀賞〉

秋の映画

京都市 戸田 和樹

おんぼろの橋の裏側は
鉄骨が露わになっている
薄緑色の塗装は剥げ落ち
ところどころ

赤茶けた錆が浮いている
吹き付けられたコンクリートの
四角い暗がりには
いくつかのスクリーンとなって
川の流れに反射する光の鼓動を
映し出している

光は

秋の気配を呼吸し
その吐かれた息は
スクリーンの中で
揺らめいている

鉄骨の影は

縦に横に

斜めに横たわり

スクリーンに閉じこめられたモノクロの
光の面積の中で
時の流れと川の流れが交わっている

コマーシャルや

予告編のない秋の映画は

入場無料で映し出され

それは

まるで秋の空が

真っ青に透き通っていることを

知らせている

その映画には

ぼく以外の登場人物は

誰も

出てこない

〔評〕

川の流れを反射する光の鼓動を映し出している秋の気配を「スクリーンの中で揺らめいている」という発見。作者は、川の流れに反射した「秋の空の」美しさに心を動かされ「真っ青に透き通っていること」に感動しています。

書くことを通して対象を冷静に見つめ、川に写された秋の気配と光の鮮やかさがうまく表現されています。ストレートに心のイメージを想起させる詩になっています。

「灯りに向かって」

高槻市 打浪 紘一

太陽が沈むと

わずかに煌めいていた川面も

黒く撓んだ帯になった

この川沿いの道は

何度か歩いたことがあるから

私はためらわず前に進む

もう少し行けば

鉄橋の手前で踏切にぶつかるはずだ

ほら、あそこを電車が通っている

電車が轟音とともに通り過ぎたあとは

急に闇が濃くなった気がする

やって来た道を振り返ってみたが

私の後方はもはや闇に溶け込み

風が揺さぶるスキのざわめきだけが

迷い始めた私を囁っているようだ

私は萎えそうな心を鼓舞して

一步一步足を前に運ぶ

ふと立ち止まると闇の中に

ふわふわと光るものが浮いている

その一つが魂のように

私の手のひらに舞い降りた

ああ、ホタルだ
その儚げな小さな命の明滅が
私を勇気づけて
歩みを支えてくれるようだ

誰かに名前を呼ばれたような気がした
ぼんやりとした人影が聞きなれた声で
「あなた」と声をかける
暗くなつて一人で出かけちゃ駄目ですよ
ああ、いつもの妻の声だ
腕をとられて明るい方角へ歩き出す
ホタルを見たよ、きれいだったよ
徘徊じゃないよ、散歩だよ、心配ないよと
心の中で何度も繰り返しながら

〔評〕

老いることの不安、後期高齢者には身につまされる作品です。何
度も歩いた道、夜中に私は一步一步足を運びます。徘徊ではなく
散歩に家をでたが、立ち止まると闇の中に光るものを見つめます。
「ああ、ホタルだ」小さな命の点滅に勇気づけられ歩みを進めます。
そんな時、妻が迎えにきます。人生の縮図をみる思いです。心の奥
に秘めていた魂のかけらを見つめた詩作品に仕上がっています。

〈秀作賞〉

七色の夢

岐阜各務野高等学校 平光 咲希

赤色の炎
心の底で燃え上がり
夢の第一歩を
情熱の旗に刻む

橙色の陽光
朝霧をそつと溶かし
夢の種を
柔らかな土に委ねる

黄色の輝き
笑顔の花を咲かせ
風に揺れる
夢の地図を照らす

緑色の囁き
森の深みで響き合い
安らぎの夢を
命の脈に紡ぐ

青色の静寂

空と海の狭間で漂い

無限の夢を

星屑の橋に架ける

藍色の深み

夜の帳に沈む

内なる声は

真実の夢を呼ぶ

紫色の神秘

虹の果てで揺らめき

魂の色彩を

永遠の夢に重ねる

七色の虹

空に大きな弧を描き

私たちの夢を

光の糸で紡ぐ

たとえ消えても

胸に残る七つの色彩

虹の輝きは

夢の彼方へと導く

〔評〕

七つの色彩をもつ「虹の輝き」を「赤の炎」「橙色の陽光」「黄色の輝き」「緑色の囁き」「青色の静寂」「藍色の深み」「紫色の神秘」と七色に分けて表現しています。永遠の夢として虹の輝きを「夢の彼方へと導く」として結んでいます。高校生らしい青春の思いを虹にのせて描写しています。

天狗の鼻

世田谷区 佐久間 信

それは私の勘違いが始まりであつた
安いではないか

この米

千円も安いぞ

間違いない

あのスーパ―よりも

私は良く調べないで

すぐ買うくせがある

これはなおらない

いや だんだんひどくなってくる

反省はしてる

家の者^もん達はもうあきれてる

自分としては正しい判断

をしてると思ってる

その時点では

後でわかる甘かったと

自己嫌悪におちいる

若い時は

安物買いの銭失いで

今じゃその延長

後で高くつく買い物ばかり

すぐこわれる いらなくなる

さて 今日は大丈夫

千円も安いぞ

間違いない

馬鹿にされてたまるか

家の者^もん達に

天狗になる

なってるぞ

そうは問屋が卸さないという結果になる

慣れない買物はしちゃいけない

ブランドとブренд

間違った

鼻はへしおられた

〔評〕

「天狗になってやる」として「鼻はへしおられる」という自分のあさはかさ。「ブランド」で「ブренд」を間違える自分。勘違いから日常生活の中での出来事をユーモラスに描かれています。率直な表現の中に作者の思いが垣間見ることが出来ます。思いが伝わる詩になっています。

八月三十一日

川崎市 渡辺 美奈

夏休みが終わる
もうすぐ

絵日記を書く宿題が好きじゃなかった

どうして大人はこんなものを

やれと言うのかわからなかった

大人になったら

やらなくてもいいのかと思った

幾度も暑くてサイダーを飲み

アイスをかじり

学校の行き帰りを繰り返した

社会では

会社の行き帰りを繰り返して

人生の絵を描いている

わたしは

答えのない宿題に

仰向けになり手を上げる

空はあの頃と変わらないけれども

ただ

青いだけではないとわかった

大人たちは

言わないけれど

宿題があったのだと

登校日前の気持ちは同じまま
仕事や家庭やその他諸々の

永遠の責任を

ランドセルに詰め込んでいる

少し重い

明日が来る前に

宿題をやらなければ

さわやかな

あの夏が恋しい

〔評〕

空はあの頃と変わらないのに「ただ青いだけはない」と分かった作者は、もう一度「さわやかなあの夏が恋しい」とつぶやきます。学生時代を自由に過ごし、社会にでて、仕事や家庭での責任を持って生きていく大人の生き様に直面します。「明日が来る前に宿題」を終わらせなければならぬ人生の縮図を表現しています。素直な思いが響いてきます。

〈審査員作品〉

大和の風

稲垣 和秋

薄曇りの春の陽が
森のすべてを吸い込んでいる静けさに
この不確実不確定な時代に
馬酔木の花が垂れている

大和の一隅に
天上なる人間の祈りの塔
風雨 天災の厄をまぬがれた
薬師寺の東塔は
時代をこえて
天空に鮮やかに映える

今のこの世はいさかいの
ガサの嘆き
瓦礫の山
この世に生きていると
思いがけないところに
落とし穴がある
お金が入ると贅沢になり
力を手に入れると
おごりたかぶる

唐招提寺に
盲目の身で
杖をたよりに菩薩の法を求めて
何度かの渡航の災難をこえ
この大和西の京に住まった
老僧は仏道を求めて
白い砂の上をたどる
和上の足音が
天平を越えて
大和の地に風をおこした

〔総評〕

詩を作るにあたり、自分の感情や考えを述べるにあたって、まず自分の心の感情と情緒との言葉の葛藤から始まります。言葉の意味、イメージ、ひびきを探るのです。

何気ない風景に心惹かれたり、思わぬ人に出会ったときめいたり、生きていると心驚かされることがあります。

全感覚を投入して言葉の働きを心の動きにどれほど照応しているか、言葉の手ごたえを確かめて詩作します。

一篇の詩には作者のつらく哀しい思い、あるいは感動した思いが隠されています。作者の思いが読者の魂に届くかを吟味することも大切です。

今回も高校生から高齢者までたくさんの作品をよせていただきました。羽島市など近郊からの作品が少なく、全国的応募が主流になってきています。

これからも、日常のさまざまな驚きの中に隠れている詩情をとらえ、しなやかな感性で心をゆさぶる詩に作品化していただく。来年も多くの応募を楽しみにしています。

評 稲垣 和秋

外山 澤子

令和7年度 第52回 羽島市文芸祭（一般の部）

【趣 旨】

文芸への創作意欲を高め、文芸活動の振興とともに地域文化の向上を図ることを目的とする。

【募集部門】

部門	応募点数	題	審査員
短 歌	1人3首以内	自由詠	藤田 正代・松野 律子
俳 句	1人3句以内	季語自由	櫛 未知子・清水 青風
川 柳	1人3句以内	題材自由	今井 極子・南 さと奈
現代詩	1人2篇以内	題材自由	稲垣 和秋・外山 澤子

【三賞・入選選考結果】

部 門		応募者数	応募点数	三 賞	入 選	入賞・入選合計
短 歌	一般	75	205	6	11	17
	高校生	0	0			
部門小計		75	205			
俳 句	一般	124	359	6	25	31
	高校生	2	4			
部門小計		126	363			
川 柳	一般	103	293	6	19	25
	高校生	0	0			
部門小計		103	293			
現代詩	一般	26	42	6	14	20
	高校生	10	19			
部門小計		36	61			
合 計		340	922	24	69	93

羽島市市民協働部
生涯学習課

羽島市竹鼻町 55 番地

TEL 058(392)1111

令和 7 年 11 月